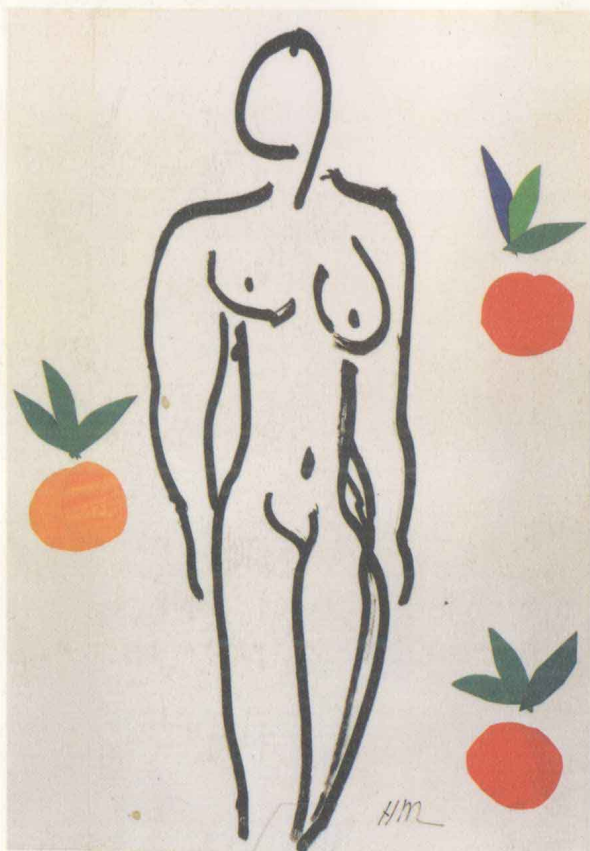


# うたかた

第20巻 渡辺淳一 全集



角川書店

# うたかた

第20卷

## 渡辺淳一全集

江苏工业学院图书馆  
藏书章



角川書店

渡辺淳一全集 第20巻

うたかた 他五編

平成八年十二月二十五日 初版発行

著 者——渡辺淳一

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二・一三・三

千〇〇 振替〇〇二・三〇・九・一九五二〇八

電話／営業部〇三・三三・三八・八五二一

編集部〇三・三八・一七・八五八一

印刷所——暁印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り扱いいたします。

© JUNICHI WATANABE 1996

Printed in Japan ISBN4-04-573620-4 C0393

渡辺淳一全集

第20卷

うたかた

他五編

装画 || ア・ン・リ・マ・チ・ス  
装幀 || 三村 淳

©Succession H. Matisse, Paris & SPDA, Tokyo, 1996

〈カバー画〉 Henri MATISSE Nu aux oranges  
〈扉画〉 Henri MATISSE Le guignon [1931-1932]

渡辺淳一全集 第20巻 目次

|              |     |
|--------------|-----|
| うたかた……………    | 5   |
| ＊……………       |     |
| パリ行最終便……………  | 333 |
| 流水の原……………    | 339 |
| 玉虫厨子……………    | 385 |
| 桜いろの桜子……………  | 413 |
| ある心中の失敗…………… | 431 |
| 解説・秋山 駿…………… | 445 |



う  
た  
か  
た

うたかた 目次

|             |             |             |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 冷夏<br>..... | 白夜<br>..... | 緑陰<br>..... | 花冷<br>..... | 春暁<br>..... | 浅春<br>..... |
| 136         | 107         | 88          | 55          | 38          | 9           |

---

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| あとがき | ..... | 330 |
| 冬館   | ..... | 309 |
| 冬の川  | ..... | 270 |
| 秋野   | ..... | 228 |
| 月代   | ..... | 185 |
| 驟雨   | ..... | 161 |



## 浅 春

樹の間に海が光っている。

覺敷きの広縁の前には椿の植込みがあり、その先に百日紅の枝が伸びて、正面の海を区切っている。

安芸隆之はこの部屋からの眺めが気に入っていた。

海に向かって開かれた和室からは、周りを取り巻く樹々とともに、四季それぞれの風情を楽しむことができる。

だがなかでも安芸が気に入っているのは、春が浅いころのこの部屋からの眺めであった。

東京ではまだ冷え込みが厳しく、ときに雪さえ見るのに、ここにはすでに春が訪れている。

今度、この宿をたずねる気になったのも、一足早く春の息吹きに触れたくなったからである。

そしていま一つ、浅見抄子を伴うという目的もあった。どういふわけか、抄子が一日だけ遠出ができるといった

とき、安芸は即座に伊豆山のこの宿を思い出した。

「熱海から車で十分もかからない、ひっそりとした旅館だ」

安芸の説明に、抄子は軽くうなずいた。

「蓬萊という。中国のいい伝えでは、東方の海上にあって、仙人が住む不老不死の理想郷だということになっている」

「じゃあ、行ったら帰れなくなりますね」

「そうだ、帰れない」

帰れなくなるといっても、抄子が本心からそう思っていないことはあきらかだった。

だが安芸は半ば本気で、それが現実になることを想像していた。

「前から、一緒にきたいと思っていた」

安芸は縁先に近い陽だまりに坐って、煙草に火をつけた。

「こまでくれば、安心だ」

「安心？」

「そう思わないか」

部屋は急な斜面の中腹にあって、眼下には楠や山桃などの巨木が茂っている。

「おだやかな海だわ」

海を見ている抄子のマスカットグリーンのツーピースが、春の陽を受けてやわらかい。部屋で二人だけになって、抄子はようやく落ち着いたようである。

突然、左手の樹間で鋭い啼き声<sup>な</sup>がして鳥が飛び去っていく。尾が細く長かったところを見ると、百舌かもしれない。

安芸が縁先に身をのり出すと、抄子も上体をかがめた。椿の植込みの先は急な傾斜になっているので、上から覗き込む形になる。

「あんなに、光っているわ」

崖の下はすぐ海になり、樹の葉のあいだから見える水面が小刻みに光りを照り返している。

「大分、陽が傾いてきた」

「四時を少し過ぎました」

抄子が腕時計を見て答えた。安芸は喫いかけの煙草を揉み消して空を見た。

正面の植込みの先にある百日紅<sup>さるすべり</sup>が、曲りくねった梢<sup>しずえ</sup>を宙に突き出し、その果てに色づきはじめた空がある。まだ寒<sup>かん</sup>のうちに、空は水蒸気を含んだように湿っている。

「もう、春の空だ」

「東京とは、違うわ」

安芸は「春めく」という言葉を思い出した。春は梢の果ての空にとどまっている。

「長年、外国で過ごした人がここへくると、忘れていた日本の風景があるといって二、三日、暢<sup>の</sup>んびり休んでいくらしい」

「その気持、なんとなくわかります」

「われわれも、そうしようか……」

抄子がふいと目をそらした。一夜泊ることさえようやくなのに、三日も四日もいられるわけではない。抄子はそういったのかもしいない。

「ご免なさい」

「君が謝ることはない」

抄子が人妻であることを、安芸は初めから知っていた。それを承知で、つい我儘<sup>わがまま</sup>をいいたくなっただけである。

「あなたは、ずっとここにいたいのでしょうか」

「そんなことはないが……」

当座、原稿を書くだけの仕事なら、この宿でできないことはなかった。

「ここなら、海が見えて気持も安まるでしょう」

「気持が安まっても、一人では仕方がない」

抄子と海の見えるところで過ごしたいと、安芸は何度か思ったことがある。だがそれが容易にかなえられないことも、安芸は知っていた。

部屋の右手は大きな山茶花<sup>さざんか</sup>と金木犀<sup>きんもぎせ</sup>の茂みになり、その先に芝生の庭がある。玄関のある本屋から数寄屋造りの客室へ続く、渡り廊下に囲まれた中庭だが、急な斜面にできた平地だけに開放感がある。

二人は廊下の端に揃えてあつた草履をかりて、芝生の先まで行つてみた。

ここまできると真下に湯屋の屋根が見え、右手の急な斜面にそつて湯屋までの渡り廊下が延びている。

「この下の湯は走り湯といつて、昔は山肌から直接、海に噴き出していたらしい」

安芸は何度か、その湯にもつかつてゐる。

「このあたりは源氏に由緒の深い土地で、流人であつた頼朝が北条政子と逢引きした、逢初橋という橋もあるらしい」

抄子がかすかに笑つたので、安芸がきき返した。

「おかしい？」

「頼朝という人のイメージと、逢引きというのが合わないような気がして……」

「たしかにそうだが、頼朝の若い時のことだろう」

「あれは、桜でしようか」

湯屋へ続く渡り廊下の先に、一本だけ花を咲かせた樹がある。

「緋寒桜じゃないかな」

「やっぱり、温かいんだわ」

やや水蒸気を含んだ空が西の方から暮れかけている。

「あちらが伊豆半島だ」

正面の相模湾をつつむように、右に岬が突き出ている。手前の濃く見える先端が船着場で、その奥の紫色に霞んでいるところは網代だときいたことがある。

「正面に平たく見えるのが初島で、その先に薄く見えるのが大島だ。晴れていると、ここからでも噴煙が見える」

「ずいぶん、近いのですね」

抄子が額に手を当てて目を細める。やわらかく開かれたスートの胸元が、三十五歳の女の成熟を思わせる。

「こんな穏やかな日も、珍しい」

二人の前には椿と皐月の植込みがあり、その先に八重水仙が小さな花を咲かせている。

「連れてきてもらつて、よかったわ」

海に向かって髪をかきあげる抄子の横顔には、夫を裏切つて旅に出ている翳りはない。

夕暮れの海を見て部屋へ戻ると、安芸は宿の浴衣を着て羽織を重ねた。

「下の風呂へ行つてみよう」

夕食までには一時間ほどあるので、湯につかるには丁度いい時間である。

「この宿自慢の総檜の風呂だ。湯につかりながら、暮れていく相模湾を見るのも悪くはない」

「でも、お風呂は一つでしよう」

走り湯という野趣を生かしたもので男女の区別はなく、女性の入浴時間だけが定められている。六時を過ぎたいまは男性の時間帯である。

「さっき、湯屋に電話をしたら、誰も入っていないといっていた」

客室は二十に満たない宿で、各々の部屋にも檜の内風呂が備えられているので、走り湯まで行く人は、あまり多くはない。

「行ってみよう、内風呂より向こうのほうがゆつたりする」

抄子とはすでに一度、一緒に風呂に入っている。半月前、安芸の原宿のマンションで逢ったあと、抄子がシャワーを浴びているときに強引に忍び込んだのである。

「とにかく湯屋まで行ってみよう。途中の道も風情がある」

抄子はようやく納得したようである。

離れで服を脱ぎはじめたが、やがて白地に藍の花柄の浮いた浴衣を着て現れた。

「それは、君がデザインしたのだね」

「おかしいですか？」

「いや素敵だ、白地に浮いた花が春の夜にふさわしい」

着物デザイナーの抄子は、今度の旅のために持ってきたらしい。

「少し冷えるかもしれないから、羽織を着たほうがいい」

抄子は身長はさほど高くないが、すらりとして着痩せする。その背に羽織を重ねてタオルを持つ。

安芸の脳裏に一瞬、他人の妻を盗んでいるという思いが横切る。

湯屋までの径は急峻な傾斜にそって石段になり、片側は檜の構いが続き、上は杉皮の天井がおおっている。途中、斜面に繁茂する自然の樹木を生かすために、ところどころに巨木の根元が露出して、それがいつそう野趣をかきたてる。

石段の左右には行灯が置かれて足元を照らす、樹間から覗く空はまだ夕暮れの名残りをとどめている。部屋から見下しているときは、樹木が繁茂しているだけと思われた斜面には、蘇鉄やフェニックスとともに鬼羊歯やハツ手が入り混っている。椰子のような暖かい土地の植物と一緒に小さな熊笹が密生しているところが面白い。

石段の半ばまで下りて振り返ると、巨木が天に向かって枝を広げている。夕暮れのなかでも、やや黄ばんで見えるのは楠で、濃い緑は山桃らしい。

「蜜柑がなってるわ」

抄子が斜面の中程を指すが、よく見ると橙である。

少し前だと落日に染って鮮やかだったろうが、赤味を帯びた黄は暮れなずんだ空にもよく映える。

いま一度石段にそって曲り、置き行灯を二つ越すと湯屋の入口に着く。板戸を開けてなかに入っていくと、やはり誰もいない。抄子がなお戸惑っている、湯屋番の老爺が顔を出した。

「大丈夫ですよ、もう他のお客さまは見えないと思います」

安芸が浴衣を脱ぎはじめると、抄子も決心したらしい。

籠にタオルを置き、帯を解きはじめた。

安芸は先に入って、湯舟に身を沈めた。

この走り湯はカリウムやナトリウムなど塩化物を含んでいるというが、無色透明で肌にすべすべした感じである。

肩まで湯に浸って見上げると、総檜で組立てられた天井は七、八メートルはあり、そこから下っている四つの円ガラスにつつまれた電球が湯に煙っている。

安芸は両肢を伸ばして湯槽の縁に背を凭せた。

正面の大きくくり抜かれた窓からは、繁みをとおして相模湾が一望の下に納められる。空はすでに暮れているが、海面は意外に明るい。そのまま夜の海を眺めていると、湯殿の板戸を開けて抄子が入ってきた。

広い浴槽には常に湯水があふれ、檜の簀子に音もなく流れていく。

脱衣所と境いする板戸はあいたが、抄子が入ってくる気配がないので振り返ると、湯殿の入口で、浴衣を着たままだぞみこんでいる。

「すぐく、明るいね」

抄子はなかの明るさに戸惑ったようである。

「かまわない、入ったらいい」

「でも、やっぱりやめます」

抄子は決心したように立上った。

「誰か、くるかもしれません」

「心配ないよ、さつき湯屋番の人も大丈夫といったろう」

「でも、万一ということがあります」

抄子は素晴らしいながら、なお珍しそうに湯殿を眺めている。

「少し塩分を含んでいるらしいが、湯がつるつるしてあたたかい。せっかくなんだから食事の前に一風呂浴びたほうがいい」

「わたし、お部屋のお風呂に入っています」

いまは他の客はいないが、このあとも絶対こないという保証はない。万一きたときに、二人で入っているのは慌てることになる。

「残念だな……」

安芸は心残りだが、一度入らないと決めたからには入りそうもない。そういうところはきっぱりしている女である。

「じゃあ、夜中に一緒にこようか」

「あなたがお休みになってから、一人できます」

「いや、そのときには目を醒ます」

深夜、二人で湯につかりながら夜の海を眺めるのも悪くはない。

「それでは、お部屋に戻っています」

抄子が湯殿の戸を閉めて去っていく。

そのうしろ姿がガラスの先に消えるのを見届けて、安芸は一つ溜息をついた。

相変らず要心深いのが、今度の旅のことを、抄子は夫にどのように告げてきたのだろうか。

抄子を初めて知ったのは、いまから一年半前であった。

秋の新作着物の展示会が日比谷のホテルであったとき、安芸はなに気なく寄ってみた。

展示の中心は女性ものであったが、男もののコーナーもあり、そこに一点、利休鼠の結城紬に深い緑の帯が添えられていた。その落着いた色合いに惹かれて眺めていると、女性の店員が近づいてきた。

「いかがですか」

安芸は着物が好きで、家でくつろぐときや食事に出かけるときなどによく着物を着る。作家という仕事から、着るものは自由であった。

「よろしかったら、お当てになってみませんか」

店員はメーカーから派遣されてきているらしく、慣れた

手つきで反物を安芸の肩に当てようとする。

「これは、ここの店のオリジナルですか」

「生地は違いますが、コーディネイトはうちの専属のデザイナーがしております」

「とても、いい色合いだ」

「ありがとうございます。よろしかったら、そのデザイナーをお呼びしましょうか」

店員は奥のほうを振り返って、手招きした。

「今日、ちょうどデザイナーが参っておりますから」

そのまま、安芸が反物を眺めていると、別の女性が近づいてきた。店員がみな同じ紺の着物を着ているのに、その女性だけは白いブラウスと濃紺のスカートをはいて、襟元に枯葉色のベイズリーのスカarfを巻いていた。

「こちらのお客さまが、この色合いがお気に召して下さって……」

いわれて、女性はゆっくりと頭を下げた。髪の内側を軽